



© 2017 北海道別海町 白井牧場

J-MILK REPORT

vol-25
2017.SUMMER

特集 6月1日は世界牛乳の日・6月は牛乳月間

- | | |
|--|--|
| <p>02 次期3か年計画策定に向けた3つの重点事項とは
新会長に西尾啓治(一般社団法人日本乳業協会 副会長)就任</p> <p>07 酪農乳業産業基盤強化特別対策事業</p> <p>08 平成29年度の生乳及び牛乳乳製品の
需給見通しと当面の課題</p> <p>10 GDP主催第1回栄養安全保障委員会(NASC)
「酪農乳業が、いかに持続可能な開発目標(SDGs)へ貢献できるか」</p> <p>10 IFCN Dairy Conference 2017
名古屋大学大学院 竹下広宣准教授より最新レポート</p> <p>11 平成29年度 乳の学術連合・学術フォーラム
現代の栄養健康課題に対するミルクの役割</p> | <p>12 第46回メディアミルクセミナー
アスリートの活躍に欠かせない牛乳乳製品</p> <p>12 海外エビデンス情報
乳脂肪にまつわる最近の話題から その1～飽和脂肪酸～</p> <p>13 サポートメンバーインタビュー
ポリコ M. チャールズ氏(FAO 駐日連絡事務所 所長)</p> <p>14 農水省「消費者の部屋」で乳和食を紹介
調理デモンストレーションや試食で乳和食理解に</p> <p>14 おいしく減塩! 乳和食レシピ
夏に食べたい栄養満点の「牛乳豆腐」</p> <p>15 乳製品が動物検疫の対象になります
農林水産省 動物衛生課 国際衛生対策室からのお知らせ</p> |
|--|--|



次期3か年計画策定に向けた3つの重点事項とは

新会長に西尾啓治（一般社団法人日本乳業協会 副会長）就任

私、本年6月16日に開催されました平成29年度定時総会後の第2回理事会におきまして、宮原会長の後任として新たに会長に選任されました。会長就任にあたり、私の使命と抱負を述べさせていただきます。

ご承知のように、Jミルクは、酪農生産者、乳業者、牛乳販売店で組織された業界団体です。このように、生産・処理・販売という、立場の異なる関係者が一堂に会して、業界の共通課題に対応する組織は、他業界にはあまり例がありません。

これは、生処販のどこが欠けても全体が機能しなくなるという、ミルク・サプライチェーンの特性に由来するものだと思います。牛乳乳製品の需給をいかに安定させるかという大きな課題を抱えている今般の状況にあって、Jミルクの役割は、ますます重要になってくると考えております。

図らずも、そうしたJミルクの会長をお引き受けすることになりましたが、大変重い責任を感じております。

宮原前会長はじめ、歴代の会長が強い指導力の下で築かれてきた成果をしっかりと引き継ぎ、皆様の期待に応えられますよう、尽力していく所存であります。

さて、わが国の酪農乳業界は、大変多くの課題を抱えております。こうした中で、Jミルクに期待されることは、わが国酪農乳業の課題にしっかりと対処する枠組みを発展させることであり、それに必要な、確かな情報を提供していくことだと思います。

そうした観点から、Jミルクでは、平成23年度以降、業界の共通課題を提起した3か年計画を立案し、その着実な推進を目指してまいりました。本年度は、平成27年度から始まった第2期3か年計画の最終年度であるとともに、次期3か年計画を策定する年でもあります。次期3か年計画の策定とその実行は、現在の酪農乳業を取り巻く環境を踏まえると、大変重要となります。

業界の実態や課題をしっかりと把握し、関係者との議論を踏まえ、ご期待に応えられる内容となるよう策定して参りたいと思いますが、特に重要な事項は三つあると考えています。

一つには酪農乳業の産業基盤強化について、着実な成果を上げてゆくことです。これ以上、国内の生乳生産量が減少してゆくことは、国産乳製品に対する消費者のニーズや期待に応えられなくなる恐れがあります。

この状況に対処するため、ご承知の通り今期より「酪農乳業産業基盤強化特別対策事業」がスタートしています。この事業は、より直接的な増産効果が期待できる乳用牛の輸入に加え、国内での後継牛確保対策の取り組みについても、支援するものです。これらの事業を通じ、わが国酪農乳業の産業基盤強化にしっかりと結びつく成果につながるよう、取り組んで参ります。

二つには牛乳乳製品のさらなる価値の向上です。

乳の学術連合の活動を通して、昨今、乳に関する多様な領域での研究が進められ、その成果が徐々に始まっています。

血圧抑制への効果や、認知症リスクの低減など、健康な生活実現に寄与する乳の栄養的なエビデンスも広範囲に明らかにされつつあります。また、日本における乳文化の定着、学校給食や食育における牛乳乳製品の有効な活用など、知見の集積を行って参りました。こうした価値情報が、業界の皆さまに利用されるよう、そして、しっかりと消費者に届くようなコミュニケーション活動を積極的に推進して参りたいと思います。

三つ目は、ますます重要な課題となっている「業務運営の効率化」です。酪農家の数が減少し、乳業工場の再編や流通の集約が進んでいく中で、業務の効率化を進めることが期待されています。広く業界からお預かりしている財源を効果的に活用して、事業成果の最大化が図れるよう取り組んで参ります。

以上、申しあげました重要な事業項目について、より良い成果を得られるよう、砂金副会長をはじめ、役職員一体となって尽力してまいりますので、会員並びに行政、関係各位におかれましては、今後とも変わらぬご支援、ご協力の程お願い申し上げます。

新役員体制について（平成29年6月16日付）

役 職	氏名・所属等
会 長（新任）	西尾 啓治 日本乳業協会 副会長
副 会 長（再任）	砂金 甚太郎 全酪連 代表理事会長
専務理事（再任）	前田 浩史 学識経験者
理 事（新任）	橋本 光宏 全国農協乳業協会 会長

事務局長の交代について（平成29年6月16日付）

役 職	氏名・所属等
事 務 局 長	百木 薫 森永乳業株式会社 出向

Jミルクの取り組み

「愛してミルク？」を全国へ発信

特設サイトやSNSを活用した情報発信も

Jミルクでは、平成29年度の「牛乳の日・牛乳月間」に合わせて、世界的な記念日としての「World Milk Day」を前面にした統一ロゴを新たに作成した。さらにサウンドロゴ、ショートムービー、ポスターやリーフレットなど統一的な啓発資材を会員を通じて酪農乳業関係者に提供。メディア広報などを通じて関係者の取り組みを支援した。

あわせて、特設サイトを開設し、啓発資材の提供を行うと同時に、Twitter、Facebook、Instagramなども活用し、情報の拡散、共有を図った。

特に、酪農乳業の国際組織(GDP)から提案された、6月1日の牛乳の日に合わせて世界中で「ミルクで乾杯！」している写真をInstagramなどに投稿する企画を実施したが、Jミルクから業界関係者に呼びかけを行ったところ、約150(Istagram)の投稿があった。

「牛乳の日・牛乳月間」
特設サイト



新規ツール



新しくなったロゴ



啓発用リーフレット

1L牛乳パックの広告欄へ掲載



雪印メグミルク(株)
「雪印メグミルク牛乳」



大山乳業農業協同組合
「白バラ牛乳」



森永乳業(株)
「森永のおいしい牛乳」

全国各地のツール活用事例



千葉県牛乳普及協会
イベントで配布された
スタンプラリーの用紙



宮城県牛乳普及協会
ポケットティッシュ



九州生乳販売農業協同組合連合会
180cm×180cmの顔出し
パネルをイベントで設置



日本乳業協会
3-A-Dayとコラボ
した付箋を制作



広島県牛乳普及協会
知事訪問時に着用したTシャツ
と設置されたパネルボード

全国各地でイベント開催

牛乳乳製品の認知度向上へ、業界団体・乳業メーカーが連携

牛乳の日（6月1日）・牛乳月間（6月）に合わせ、酪農乳業団体・企業が全国各地でイベントを行った。

事前に会員の皆様から寄せられた実施予定では、北海道・東北で13件、関東・北陸で20件、東海・近畿で23件、中国・四国で14件、九州で4件のイベントが行われた。その他にも、全国酪農青年女性会議による「父の日に牛乳（ちち）を贈ろう！キャンペーン」が49件、乳業工

場見学が、全国各地で65件行われた。

Jミルクは、一般社団法人日本乳業協会が主催する「おいしいミルクセミナー」に、一般社団法人中央酪農会議とともに共催で参加。6月1日に都内で行われたセミナーでは、多くの消費者に牛乳乳製品の「栄養的重要性」、「乳和食」をアピールした。



おいしいミルクセミナー ～乳和食でヘルスケア～

主催／日本乳業協会
協力／中央酪農会議、Jミルク
会場／パレスホテル立川(東京)



女子栄養大学の西一弘教授が「牛乳摂取で骨太人生を目指そう」をテーマに講演や小山浩子先生による乳和食セミナーなどを行った。「愛してミルク？」のサウンドロゴも使用し、最後に来場者一同で「ミルクで乾杯！」を行った。

六本木牧場

主催／中央酪農会議
会場／六本木ヒルズアリーナ

ゲストに女子レスリングの吉田沙保里さんを迎え、酪農家と共に「ミルクで乾杯！」を実施。恒例の酪農家男前コンテストの他、酪農家によるバター作り体験や牧草ベット体験など都心と思えぬ雰囲気、参加した子供たちの笑顔が輝いていた。



「父の日に牛乳(ちち)を贈ろうキャンペーン」

主催／大分県酪農青年女性会議、大分県牛乳普及協会
会場／パークプレイス大分

地元酪農家の指導を受けながら牛の搾乳体験や仔牛2頭の触れ合い体験などを父の日の前週に実施。家族連れなど約200人が集まり大盛況だった。会場ではJミルクのサウンドロゴが流れた。



ミルクフェア
 主催／JA全中
 協力／JA全農酪農部、
 中央酪農会議
 会場／東京・JA大手町ビル
 農業・農村ギャラリー
 『ミノール』

「牛乳まぜまぜコーナー」では落花生パウダーとの意外な組み合わせが好評。乳製品好きの女性客で盛況。



秋じゃないけど収穫祭
 主催／テレビ神奈川日本大通り活性化委員会
 協賛／神奈川県牛乳普及協会
 会場／横浜市日本大通り

地元牛乳の無料配布とともに牛乳アンケートを配り、牛乳相談コーナーを設け、PRを行った。



ミルクフェア
 主催／全農埼玉県本部、埼玉県牛乳普及協会、埼玉県乳業協会
 会場／埼玉県こども動物自然公園

元酪農家で埼玉県深谷市の村川徳浩議員による「ミルク082くん」も協力し、搾乳体験や音楽に載せたバター作り体験を開催。



ミルクフェスティバル2017
 主催／千葉県牛乳普及協会、千葉県酪農農業協同組合連合会
 場所／千葉県立北総花の丘公園

ロコモ体操、牛乳パック使用の帽子づくり、小山浩子先生の「やさしい健康おやつ」の調理デモなどを実施。



広島県庁県知事訪問
 主催／広島県牛乳普及協会、広島県酪農農業協同組合

「認知度UP！6月は牛乳月間！広島県産牛乳と乳和食で健康寿命を延ばそう！」と銘打ち、「愛してミルク？」のロゴ入りTシャツで湯崎英彦県知事を表敬訪問した。



おおさき食楽まつり2017
 主催／食楽まつり実行委員会
 共催／宮城県牛乳普及協会
 場所／鳴子峡レストハウス
 特設会場

宮城県のご当地グルメの祭典で、牛乳の試飲会やノベルティの抽選会を行った。



ワールドミルクデー企画
 共催／愛知県酪農農業協同組合、東海酪農協同組合連合会、愛知県牛乳普及協会、全国酪農農業協同組合連合会
 会場／名古屋駅前

6月1日の牛乳の日当日に、7,000人を対象にパンフレットとミルクセットを配布した。



松本山雅FCホームゲームで牛乳月間イベント
 主催／JA全農長野、長野県牛乳普及協会
 会場／松本平広域公園

サッカー観戦者へ松本山雅FCのチームメンバーと共に牛乳の配布や搾乳体験を行った。来場者は11,000人を超えた。



ハッピーミルクフェスタ2017
 主催／九州生乳販売農業協同組合連合会、FM福岡
 会場／福岡市三越ライオン広場

牛乳ヒゲコンテストや牛乳マジックステージなどを実施し、FM福岡の公開録音とともに会場を盛り上げた。



特設サイトとTVCM放映
 主催／ミルクランド北海道（ホクレン農業協同組合連合会）

TVCMで牛乳を使った料理を放映。特設サイトも開設し、レシピやWorld Milk Day・牛乳月間についての情報をJミルクの新ロゴも活用してPR活動を行った。

海外での取り組み

GDPによる“Raise a glass!”キャンペーン／ドナルド専務に聞く



ドナルド・ムーア氏
GDP 専務理事

—「World Milk Day」への想いをお聞かせください。
ドナルド氏：今年の「World Milk Day」のグローバルキャンペーンは三本柱で構成されていました。一つ目は国連ならびに国連食糧農業機関（FAO）事務所の活動との連携、二つ目はソーシャルメディアを活用したキャンペーン、三つ目は各国独自のイベントです。

私たちは2016年に「World Milk Day」を広めるためのプロジェクトチームを設置し、世界の酪農乳業界に一体感を持たせ、鼓舞できるような活動のあり方を検討してきました。その答えが、“Raise a glass”という完璧かつ単純明快なスローガンによるキャンペーンです。

「牛乳で乾杯」はさまざまな意味を含む表現です。

牛乳乳製品の良さや、酪農が地域コミュニティにおいて果たしている役割、酪農家が乳牛の世話や土地の保全に尽くしていること、また牛乳を届けるために働いている人々への感謝や励ましもありますし、日々の生活の中で「いいな」「よかったな」と感じた瞬間を牛乳でお祝いするという意味もあります。

グローバルキャンペーンの実施にあたっては、牛乳での乾杯をモチーフにしたロゴなどのPR用素材を開発して各国に提供したほか、SNSのハッシュタグ「#World Milk Day」の活用を呼びかけました。参加国すべてのイベントをまとめ、一体感を持った活動を展開することができたと思います。

—世界各国での活動とその反響はいかがでしたか。

ドナルド氏：「World Milk Day 2017」には世界79か国が参加し、合計578ものイベントが各国で開催されました。

またソーシャルメディアにおいては、当日だけで4億件、累計では6億2500万件という大きな反響がありました。着目すべきは、ソーシャルメディアによるつながりが酪農乳業関係者の枠を超えて一般の人々にも広がり、多くの国でポップカルチャーの領域を巻き込む社会的なキャンペーンになったことです。

たった1日で酪農乳業分野がこれほどポジティブな効果

を創り上げる活動を行ったことはかつて記憶にありません。世界の異なる国や地域の人々が、同じ日に同じ方向を目指して一体化することで実現できた成果だと思います。

—今後の「World Milk Day」の展開についてはどうお考えですか。日本国内での取り組みへの提言もお願いします。

ドナルド氏：今年の「World Milk Day」への取り組みを通じて、私たちはグローバルなキャンペーンの企画実施と管理に関して多くのことを学びました。特にソーシャルメディア活動については、2018年はさらに注力すべき点と考えています。

他の分野で時間をかけたい活動のひとつが“ソーシャル・リスニング”です。ソーシャルメディアチャンネルを通じて世間の会話に耳を傾けることで、人々が酪農乳業にどのような意見や感情を持っているかを把握することができます。2017年に行ったソーシャル・リスニングの試行では、牛乳否定者における感情の本質とそのような否定派の動きを知ることで、異なる考えを持つグループをどのように扱うべきか、さらに理解を深めることができました。

日本は以前からさまざまな取り組みを通じて「World Milk Day」を盛り上げてきた実績があり、多くの国々の先を行く存在です。日本独自に実施しているキャンペーンの内容はもちろん、酪農乳業全体を巻き込んだ活動をつくってきた業界関係者の努力に感銘を受けています。

今後グローバルな活動との連携を強化することで、日本国内でのキャンペーンをさらに充実させることができると思います。2018年に向けて、こうした点も検討されてはいかがでしょうか。

.....
ソーシャル・リスニングとは

.....
ソーシャルメディアやブログから、消費者が日常的に語っている会話や自然な行動に関するデータを収集・分析し、マーケティングに役立てることを指します。
.....

酪農乳業産業基盤強化特別対策事業

毎号連載で経過報告

全国7か所で開催したブロック会議(4月12～25日開催)において、特に地域生産基盤強化支援事業及び国産牛乳乳製品高付加価値化事業について説明するとともに、両事業の実施要領(平成29年4月7日制定)を4月28日にJミルクホームページに掲載した。

今後も適宜、ホームページに本事業に関するQ&A等の情報を掲載していく。

1. 各事業の進捗状況と今後の課題

(1) 乳用牛資源緊急確保事業(乳用牛の輸入)

本事業は、全国連のほか、県連独自で実施する地域もあり、当面、3事業実施主体による実施となる見込み。現時点の3事業実施主体の輸入計画頭数は、初妊牛540頭、育成牛720頭、計1,260頭の予定。なお、3事業実施主体以外の、独自に輸入を行う事業者の頭数を含めると、国内への輸入は5,000頭以上となる見込み。

また、事業実施主体による防疫対策等は、日豪の防疫体制に違いがある中、国内侵入の未然防止に向け、清浄地域や発生履歴のない牧場での選畜、規定よりさらに厳しい自主検査、現地業者による監視強化等の対応が行われているところ。なお、日本側の選畜基準や防疫措置が、欧米や中国などの他の輸入国に比べ、極めて厳しいことから、豪州内で日本向けの輸入対象となる乳用牛の頭数が少なく、また価格も上昇している状況にある。

こうしたことから、適切な防疫措置を実施するとともに、より円滑な輸入牛の導入が図られるよう、引き続き、事業の改善を図って行くことが必要である。

(2) 地域生産基盤強化支援事業

国内で乳用牛資源確保対策を推進する本事業は、指定団体及びその直接の会員を事業実施主体とし、8月末を目途に事業実施計画を取りまとめる予定。指定団体では、地域の課題と解決の方針策定に向けた会議を、5月中旬以降、順次開催しており、輸入牛による後継牛確保に制約がある中で、本事業による国内対策の推進がますます重要になっており、事業の円滑な推進を図って行く必要がある。

なお、各地域が独自に企画し増頭・増産に効果のある取り組みに助成する事業について、Jミルクにおける審査手順等の準備が必要である。

(3) 国産牛乳乳製品高付加価値化事業

主な事業実施主体となる全国乳業協同組合連合会と、事業実施に向け具体的な事業の内容や推進方法等について検討を開始。特に、価格訴求から価値訴求型ビジネスモデル構築に向けた、組織的な検討や取り組みを行うのは初めてのことであり、事業目的に沿った成果をあげられるような工夫や手順について検討を行っているところ。

なお、日本乳業協会が実施するHACCP講習会等への旅費等の助成、価値訴求への転換を目指すための地域での研修会の開催などは、ブロック乳業団体が事業実施主体となる事業であり、乳業団体と連携して、その円滑な実施に向け早期に体制づくり等を行うことが必要である。

2. 酪農乳業産業基盤強化基金造成への同意乳業者等について

関係団体の協力を得ながら基金造成に係る手続きを進めており、当初の造成目標額に近づきつつある。なお、基金造成への協力を「同意」或いは「申告」した乳業者名について、酪農乳業産業基盤強化基金要領に基づき、JミルクWEBサイトにおいて平成29年5月30日に公表。

- 基盤強化対策金は、協力依頼した393乳業者中115社の乳業者から同意
- 基盤強化特別対策金は、38社からの申告があり総額は5億5000万円

今後とも引き続き乳業団体と連携して、乳業者による基金造成を推進し基金の目標額達成を目指していく。



Jミルク
特別対策事業



平成29年度の生乳及び牛乳乳製品の需給見通しと当面の課題

公表：平成29年5月25日

平成29年度第1回需給委員会(5月18日開催)での協議を経て、5月25日に「平成29年度の生乳及び牛乳乳製品の需給見通しと当面の課題」を公表した。

同日、農林水産省が発表した「29年5月のバター及び脱脂粉乳の輸入判断(脱脂粉乳21.0千トン追加輸入)」を、Jミルク需給見通しに加味した場合を、表下に追記した。

生乳生産量の見通し

29年度の生乳生産量は、北海道ではほぼ前年並み(3,893千トン・前年比99.9%)であるものの、都府県では前年度を下回り(3,349千トン・同97.1%)、その結果、全国では前年度を下回る(7,242千トン・同98.6%)見通し。

用途別処理量の見通し

29年度の用途別処理量は、「生乳供給量」が前年度を下回る(7,192千トン・前年比98.6%)見込みのなか、「飲用等向処理量」はほぼ前年並み(4,053千トン・同99.9%)と見通され、その結果、「乳製品向処理量」は前年を下回る(3,139千トン・同96.9%)見通し。

牛乳等生産量の見通し

29年度の牛乳等生産量は、「牛乳類」はほぼ前年並み(4,712千kl・前年比99.7%)の見通し。「はっ酵乳」は、大きな伸びは一巡するものの、引き続き堅調な需要が見込まれることから前年を上回る(1,103千kl・同101.0%)見通し。

脱脂粉乳・バター需給の見通し

脱脂粉乳については、29年度の生産量は前年度を下回る(116.6千トン、前年比94.4%)見通し。輸入売渡しとして、今後、29年度輸入予定数量の13.0千トンが売り渡される予定となっているものの、堅調な需要が見込まれることから、29年度末在庫量は40.7千トン(前年度末比▲7.5千トン)と減少する見込み。

バターについては、29年度の生産量は前年度を下回る(60.1千トン、同94.5%)見通し。輸入売渡しとして、今後、28年度追加輸入残量及び29年度輸入予定数量の計18.0千トンが売り渡される予定となっており、29年度末在庫量は29.2千トン(前年度末比+4.7千トン)と増加する見込み。

	生乳生産量(見通し)						用途別処理量(見通し)					
	全国		北海道		都府県		生乳供給量		飲用等向		乳製品向	
	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比	
第1四半期	1,882	98.5	993	98.5	889	98.6	1,869	98.5	1,045	100.8	824	95.8
第2四半期	1,788	97.9	981	99.4	807	96.1	1,776	97.9	1,042	100.3	734	94.6
第3四半期	1,766	98.7	953	100.6	813	96.5	1,753	98.7	1,007	100.0	746	96.9
第4四半期	1,805	99.3	965	101.3	841	97.0	1,793	99.3	958	98.4	835	100.3
上期	3,671	98.2	1,975	98.9	1,696	97.4	3,645	98.2	2,087	100.6	1,558	95.2
下期	3,571	99.0	1,918	101.0	1,653	96.7	3,547	99.0	1,966	99.2	1,581	98.7
年度計	7,242	98.6	3,893	99.9	3,349	97.1	7,192	98.6	4,053	99.9	3,139	96.9

	牛乳等生産量(見通し)											
	牛乳類		牛乳		加工乳		成分調整牛乳		乳飲料		はっ酵乳	
	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比	
第1四半期	1,210	100.2	786	101.0	25	102.9	88	104.0	310	97.0	284	97.8
第2四半期	1,238	100.1	774	99.9	26	107.5	94	102.9	345	99.3	279	102.0
第3四半期	1,174	100.1	771	99.8	24	90.2	83	101.2	296	101.5	267	100.9
第4四半期	1,091	98.1	721	98.2	22	80.8	80	96.5	268	100.3	273	103.8
上期	2,447	100.2	1,559	100.5	51	105.2	182	103.4	654	98.2	563	99.8
下期	2,264	99.2	1,492	99.0	46	85.5	163	98.9	564	100.9	540	102.3
年度計	4,712	99.7	3,051	99.8	97	94.9	345	101.2	1,219	99.4	1,103	101.0

需給動向を踏まえた当面の課題と対応について

1. 生乳生産量維持への取り組み

29年度の生乳生産量は、北海道では生産の主力となる2～4歳の乳牛頭数が下期には前年水準に回復する見込みであるものの、前年の台風上陸など飼料収穫期の天候不順の影響による飼料品質の低下等により、乳牛1頭当たり乳量(家畜改良事業団)が28年11月より前年を下回って推移しており、また今春の分娩予定頭数も前年を下回る見込み。都府県では、26年度以降、乳用牛への黒毛和種交配率(日本家畜人工授精師協会)が高止まりしている影響から、2～4歳の乳牛頭数が引き続き減少する見通しである。この結果、全国の生乳生産量は、年度を通して前年を割り込んで推移する見通し。

これらのことから、生産現場では引き続き、供用年数延長や事故率低減など乳用牛能力を最大限発揮する飼養管理の一層の徹底とともに、夏季における暑熱事故等の防止策を早めに講じて、生乳生産量の減少を最小限に留める工夫が重要である。

2. 牛乳等需要に対応した弾力的な供給体制構築への取り組み

都府県の生乳生産量が減少する見込みのなか、牛乳等需要量はほぼ前年並みで推移する見通しであることから、都府県の生

乳需給はひっ迫基調で推移するものと見込まれる。

特に、今夏においては、天候要因による生乳生産や牛乳等需要の変動によっては、都府県の生乳需給がタイトになる恐れもあることから、酪農乳業関係者は、より緊密な需給情報の共有に努めるとともに、牛乳等需要に対する弾力的な供給体制をより早期に構築し、業界一丸となって安定供給に努めることが肝要である。

3. 乳製品安定供給への取り組み

脱脂粉乳・バターの29年度生産量は、前年を下回って推移する見込みであるものの、現在、脱脂粉乳13.0千トン、バター18.0千トンの輸入乳製品が順次売り渡されているところであり、当面の需給は大きな混乱はないものと見通される。ただし、29年度末在庫量の見通しにおいては、バターは増加する見込みであるものの、脱脂粉乳は前年度末比7.5千トン減少の見込み。

こうした状況を踏まえ、国及び酪農乳業関係者は、生乳生産拡大に向け一層注力するとともに、特に、脱脂粉乳については、輸入等の適切な対応によって安定供給を図り、小売業界及びユーザーに対して適時的確な需給情報を提供し、市場からの信頼確保に努める必要がある。

脱脂粉乳の需給

	期首在庫量		生産量		輸入 売渡し C	期末在庫量			推定出回り量	
	A	前年比	B	前年比		D	月数	前年比	A+B +C-D	前年比
第1四半期	48.2	93.6	31.3	93.3	9.5	53.7	4.8	94.6	35.3	106.2
第2四半期	53.7	94.6	24.3	89.4	3.5	45.3	4.0	88.2	36.2	104.8
第3四半期	45.3	88.2	26.8	90.0		38.6	3.4	80.9	33.6	100.2
第4四半期	38.6	80.9	34.1	103.8		40.7	3.6	84.5	31.9	93.1
上期	48.2	93.6	55.6	91.5	13.0	45.3	4.0	88.2	71.5	105.4
下期	45.3	88.2	61.0	97.2		40.7	3.6	84.5	65.5	96.6
年度計	48.2	93.6	116.6	94.4	13.0	40.7	3.6	84.5	137.0	101.0
年度計(追加輸入加味)	48.2	93.6	116.6	94.4	34.0	61.7	5.5	128.1	137.0	101.0

(千トン,%)

Jミルク
生産流通



※年度計における脱脂粉乳輸入量は、29年度予定数量13.0千トン。

※年度計(追加輸入加味)は、5/25農林水産省公表の脱脂粉乳追加輸入21.0千トンを全量年度内に輸入すると仮置きした。

バターの需給

	期首在庫量		生産量		輸入 売渡し C	期末在庫量			推定出回り量	
	A	前年比	B	前年比		D	月数	前年比	A+B +C-D	前年比
第1四半期	24.5	111.0	17.1	93.3	1.7	26.9	4.4	103.0	16.4	96.1
第2四半期	26.9	103.0	12.9	89.4	2.5	24.7	4.1	93.0	17.5	103.4
第3四半期	24.7	93.0	12.5	90.0	8.6	23.0	3.8	96.4	22.8	105.8
第4四半期	23.0	96.4	17.6	103.7	5.2	29.2	4.8	119.1	16.6	95.9
上期	24.5	111.0	30.0	91.6	4.2	24.7	4.1	93.0	33.9	99.7
下期	24.7	93.0	30.1	97.6	13.8	29.2	4.8	119.1	39.5	101.4
年度計	24.5	111.0	60.1	94.5	18.0	29.2	4.8	119.1	73.4	100.6

※年度計におけるバター輸入量は、28年度追加輸入残量5.0千トンと29年度予定数量13.0千トンの合算。

学校給食用牛乳の安定的な供給及び利用の推進に係る要請

平成30年度の学校給食用牛乳供給事業に関する要請については、酪農乳業及び学乳供給現場の諸課題を踏まえ、関係者の意見・要望の取りまとめを行い、国の施策等への反映に努めることとした。

平成29年2～3月に会員団体等関係者に要請への要望を調査するアンケートを実施し、その結果を踏まえ、5月15日開催の学乳問題特別委員会において要請文案を取りまとめ、5月30日開催の理事会において内容を決定、6月5日に農林水産大臣へ要請した。



Jミルク



GDP主催第1回栄養安全保障委員会（NASC）

「酪農乳業が、いかに持続可能な開発目標（SDGs）へ貢献できるか」

GDP（Global Dairy Platform）は世界食料安全保障と食品システムに関する危機的課題について検討するため、第1回栄養安全保障委員会（NASC）を米国シカゴにて開催した。

本会の座長を務めた GDP の栄養安全保障を執する Greg Miller 博士は「本委員会の目標は、すでに栄養安全保障の分野に深く関わりながら取り組み、本課題を多次元から捉えられている専門家や団体組織からコメントや助言をいただくことにある。そして栄養面、社会面、経済面での発展が求められる中で、酪農乳業ならではのユニークな貢献が戦略づくりへの

キーになる」と語った。

この委員会の当初の焦点は、いかに酪農乳業分野が持続可能な開発目標、特に飢餓撲滅と食料の安全保障、栄養改善、持続可能な農業を広めるかということにある。

.....
GDP(Global Dairy Platform)とは

.....
2006年、グローバルメジャー乳業4社、Dairy Farmers of America、Arla Foods、Friesland Campina、Fonterraによって、酪農乳業が共通して直面している課題に、個々で対応するのではなく、一致団結して対応するために設立された。
.....



IFCN Dairy Conference 2017

名古屋大学大学院 竹下広宣准教授より最新レポート

ドイツ北部、バルト海に面する街、キールにて IFCN Dairy Conference が開催された。“酪農乳業の発展”をテーマに掲げた本会議の詳細報告は日を改めるとして、ここでは、プレ会議で耳にした話を紹介する。

4か国の現状と課題が報告される中、印象的だったのはウガンダの話。恥ずかしながら、私がこの国に関する知識は、アミン大統領による国民虐殺のみ。内陸にあり、東にケニアが隣接していることすら知らなかった。

さて、肝心の報告内容であるが、この国は3年で乳生産量を飛躍的に伸ばし、輸入国から輸出国へと転じたというのである。これまでこの国にケニアの乳製品が並んでいたのが、今では、ケニアにこの国の乳製品が並んでいるようだ。なぜ？ 答えは急速な酪農生産大規模化、生産手法近代化にある。そして、これを促したのは SMP 輸出を経済発展の手段に据える政府の投資支援であることを知った。

はて、第二、第三のウガンダが登場すると、SMP 市場価格や流通構造はどうなるだろうか？ ふと、そんなことを頭によぎらせる報告であった。



.....
IFCN(International Farm Comparison Network)とは

.....
1997年に設立された酪農乳業の研究者と事業者の国際ネットワークで、各国の酪農関連事業者などおよそ100組織、90か国ほどの研究者が会員として参加している。会員から収集した酪農乳業に関するデータを分析し、2000年から毎年「IFCN Dairy Report」として公表している。
.....



平成29年度 乳の学術連合・学術フォーラム 現代の栄養健康課題に対するミルクの役割

乳の学術連合とJミルクが共催する「平成29年度 乳の学術連合・学術フォーラム」が6月3日都内で開催された。乳の学術連合の研究活動成果を業界関係者や研究者に新たな知見として共有し、現代社会における牛乳乳製品の価値や可能性を考える場として実施したもの。「現代人の栄養健康課題に関する乳の最新知見とその意義」をテーマに、講演やパネルディスカッションを行い、研究者や専門家、業界関係者らを中心に約200名が参加した。

Program

- 講演 1** 牛乳と循環器疾患予防に関する最新情報
岡山 明氏（生活習慣病予防研究センター代表）
- 講演 2** 超高齢社会における牛乳乳製品の役割
清原 裕氏（公益社団法人久山生活習慣病研究所代表理事）
- 講演 3** 世界的な食料・栄養問題に対する酪農乳業の役割について
鈴木 良紀（一般社団法人Jミルク広報グループ次長）

パネルディスカッション

テーマ：現代人の健康栄養課題を踏まえた、新たな乳の栄養価値の視点
座長：中村 丁次氏（神奈川県立保健福祉大学学長）
パネリスト：桑田 有氏（人間総合科学大学大学院教授）
ほか、岡山 明氏、清原 裕氏、鈴木 良紀氏

認知症や循環器疾患の予防効果に注目

開会に先立ち、主催者を代表してあいさつした乳の学術連合運営委員会の折茂肇委員長は、健康科学・社会文化・食育の3分野で構成する学術連合が着実な研究成果を上げていることを強調するとともに、「研究者や酪農乳業関係者が一緒に議論することが、日本人の望ましい食生活や食料生産への展望と、日本の乳利用文化の価値が評価される一助となることを期待したい」と述べた。

前半の講演では、最初に岡山明氏が循環器疾患予防と牛乳乳製品の関連を最新の国内外における疫学研究を分析した結果を示しながら解説。ナトリウム（食塩）を減らしカリウムを増やす対策の基盤として、牛乳乳製品が大きな役割を果たしうると指摘した。清原裕氏は、久山町での長



岡山 明氏
生活習慣病予防
研究センター代表



清原 裕氏
公益社団法人
久山生活習慣病研究所
代表理事



鈴木 良紀
一般社団法人Jミルク
広報グループ 次長

期疫学研究により明らかになった認知症予防策のひとつとして、牛乳乳製品などを取り入れた食事パターンを紹介した。Jミルクの鈴木良紀からは、国連食糧農業機関（FAO）で議論になっている地球規模の栄養食料問題改善に向けて、国際的な酪農乳業組織の取り組みを説明した。

後半は中村丁次氏を座長に、桑田有氏（人間総合科学大学大学院教授）と講演者がパネルディスカッションを行った。日本人の健康課題や世界的な食料問題に対して牛乳乳製品と酪農乳業が果たす役割を総括したほか、各種学術研究によって得られたエビデンスを、具体的な予防策につなげるための手立てなどを話し合った。



桑田 有氏
人間総合科学大学大学院 教授



中村 丁次氏
神奈川県立保健福祉大学 学長



学術
フォーラム



パネルディスカッション

第46回メディアミルクセミナー

アスリートの活躍に欠かせない牛乳乳製品



鈴木 志保子氏
神奈川県立
保健福祉大学 教授

Jミルクは、「アスリートの育成・活躍を支える公認スポーツ栄養士～スポーツにおける栄養管理の重要性と牛乳の役割～」をテーマに、メディアミルクセミナーを5月18日都内で開催した。

講演で鈴木教授は「運動によってエネルギーや栄養素の必要量が

増えれば、食事量も増やす必要があるが、胃の容量の限界や運動で交感神経が優位になることで消化・吸収効率が低下するなど、単純に食事量を増やすだけでは対応で

きない。このため効率を考えた栄養士のサポートで、栄養摂取のギャップを埋めることが必須となっている。

アスリートの栄養管理において、牛乳もしくは乳製品は毎日必ず摂取するように指導されている。主食、主菜、副菜といった食事の構成要素と同様に重要な食品であり、栄養のバランスを考えると牛乳乳製品を入れない食事は成り立たない。また、朝に牛乳を飲むことが睡眠や生活リズムの維持にもつながる」と述べた。

Jミルク
報道用基礎資料



海外エビデンス情報

新連載

乳脂肪にまつわる最近の話題 その1～飽和脂肪酸～

牛乳乳製品に関する誤解や誹謗・中傷に対しては、学問的なエビデンスに即した正確な情報を発信したり、反論したりする必要があります。そのために牛乳と健康に関して、今学問の世界でどのようなことが話題になっているのかを知ることも、私たちJミルクの重要な業務の一部となっています。

乳脂肪に含まれる脂肪酸には、飽和・不飽和、トランス・シス、短鎖・中鎖など多くの種類があります。このコラムでは、これら脂肪酸にまつわる最近の話題を、海外の情報をまじえながらご紹介していきます。今回は「飽和脂肪酸」についてのホットな話題です。

肥満、心臓血管病、糖尿病、脳卒中などの生活習慣病の発症リスクは、食生活習慣に大きく関わっているというのは研究者間でほぼ一致した見解です。こうした中で「牛乳は脂肪分を多く含むので飲みすぎに注意しましょう」という言い方がされることがあります。脂肪の摂りすぎは肥満の原因になり、肥満は糖尿病や心臓血管病などの生活習慣病につながっていくので、肥満は健康の敵である、だから、比較的脂肪分の多い牛乳に対してこのような言い方がされるというのが一点。もうひとつは、牛乳の脂肪には、動物性脂肪に特徴的な飽和脂肪酸の含量が多く、特にこの飽和脂肪酸の摂取を控えましょうという意味合いが含まれています。

血中に悪玉コレステロール(LDL-C)が多くなると、動脈硬化を引き起こし、心臓血管病の発症に結びつくと考えられているのですが、飽和脂肪酸にはLDL-Cを上昇させる働きがあるとされています。

飽和脂肪酸は牛乳や肉類など動物性脂肪に多く含まれていることから、現在多くの国で心血管系の健康のために、脂肪分を取り除いた低脂肪牛乳の摂取を推奨する食事摂取ガイドラインが設けられています。

ところがここ2～3年の間に報告された疫学研究の結果、これを見直すべきではないかという議論が巻き起こってきているのです。(つづく)

身近なミルクを通じて世界の食料問題を考えてほしい

ポリコ M. チャールズ氏（国際連合食糧農業機関（FAO）駐日連絡事務所 所長）

— 食品としてのミルクの価値をどうお考えですか。

ポリコ氏：「腹が減っては戦ができぬ」という言葉があるように、食は命の源です。なかでもミルクは栄養価の高い食品として、子どもからお年寄りまで多くの人に摂ってもらいたいと思っています。私が初めて牛乳を飲んだのは18歳のとき、首都キンシャサを訪れた際でした。それからミルクが好きになって、今でもヨーグルトは毎日食べています。

ミルクを飲む際には、酪農家のおかげでこうした食品が作られていることを考えてほしいですね。生産者に思いを寄せてミルクを飲むことが、食の問題への意識を高めることにつながります。

とりわけ重要な課題は、世界にはミルクを飲みたくても手に入らない人がたくさんいる一方で、先進国では膨大な量の食品が廃棄されていること。こんなに大事なものを簡単に捨てていいのでしょうか。無駄に捨てられている食べ物を、困っている子どもたちに届ける方法はないのでしょうか。皆さんにもぜひ一緒に考えていただきたい課題です。

— 日本での「World Milk Day」(6月1日)の活動への期待は。

ポリコ氏：いまの日本人にとってミルクは、生まれたときから当たり前のように飲んでいる身近な食品で、その重要性を意識する機会は少ないでしょう。乳業界が社会に働きかけ、認知度を高める取り組みは大切です。

「World Milk Day」は文字通り世界でFAOが提唱しているもので、日本でも「牛乳月間」の6月には、酪農家や乳牛とのふれあい、牛乳工場見学など多様なイベントが各地で開催されています。自分で体感することによって、ものの見方や感じ方は大きく変わりますから、「World Milk Day」の関連イベントが、ミルクや食への意識を変えるきっかけになることを期待しています。

Jミルクの活動を支援していただいている業界関係者や、酪農乳業や食と関わりの深い方々に、今後の取り組みへの期待や提言を語っていただくコーナーです。



ポリコ M. チャールズ氏
国際連合食糧農業機関（FAO）
駐日連絡事務所 所長

— 国連の「持続可能な開発目標（SDGs）」のひとつである「飢餓ゼロ」への取り組みについては。

ポリコ氏：「飢餓ゼロ」は、どの国や地域の、誰ひとり飢餓状態に取り残さないという意味を含めた目標です。これは言い換えると、「誰もが貢献できる」という意味でもあります。

一人ひとりにできる貢献として、先に述べた食品廃棄の問題があります。必要以上の食品を買って、「ほんの一口だから」と簡単に捨ててしまう。たとえわずかな量でも世界何億人分も集まると膨大で、廃棄された食品は温室効果ガスの大きな排出源になっています。食品廃棄の削減は、持続可能な開発への第一歩となる重要課題なのです。

国連が示すSDGs17の開発目標は、ひとつの組織で実現できるものではありません。世界の国々や企業、NGO、専門機関が連携して取り組むことが大切です。FAOでは各国政府との連携強化を図っており、日本でも超党派の国会議員による「国際連合食糧農業機関（FAO）議員連盟」が5月に設立されました。今後もJミルクをはじめとする業界団体とのパートナーシップをさらに深めながら、「飢餓ゼロ」の実現を目指していきたいと考えています。



JミルクHP

国際連合食糧農業機関（FAO）とは

世界の農林水産業の発展と農村開発に取り組む国連の専門機関。196の加盟国（2つの準加盟国含む）およびEU（欧州連合）から成り、本部はイタリアのローマ。世界の人々の栄養と生活水準および農業生産性を向上し、農村に生活する人々の生活条件を改善し、世界経済成長へ寄与することを使命とする。

農水省「消費者の部屋」で乳和食を紹介

調理デモンストレーションや試食で乳和食理解に

農林水産省「消費者の部屋」において、小山浩子氏による乳和食の調理デモンストレーションなどを実施した。

調味料による塩分過多やカルシウム不足が弱点と言われる和食。調理に牛乳をうまく取り入れることで、和食の欠点を補う効果が見込める「乳和食」を参加者に紹介した。デモンストレーションで作られた「乳清ごはん」や「鮭のミルク塩麹漬け焼き」などを試食した農水省の大野畜産部長は、「とてもおいしい。牛乳の匂いもしないので、本当に牛乳を使っていると思えない」と感想を語った。

実施日時 5月31日(水)
 実施場所 農林水産省消費者の部屋(東京都)
 実施内容 乳和食の調理デモンストレーション(5品)
 主催 農林水産省(協力・Jミルク)



New-
Washoku



材料(2人分)

A 牛乳……………360ml
 かたくり粉…大さじ4

B しょうゆ……………小さじ1
 水……………小さじ1
 砂糖……………小さじ1/2
 しょうが……………適量
 刻みねぎ……………適量

水割りしょうゆ【水1:しょうゆ1】を習慣化すると味覚が変わり、減塩しやすくなります。

1人分

エネルギー
188kcal

カルシウム
206mg

塩分
0.6g

おいしく減塩! 乳和食レシピ

夏に食べたい栄養満点の 牛乳豆腐

レシピ:小山浩子氏
 (料理家・管理栄養士)



牛乳と片栗粉があればすぐに作れる牛乳豆腐。きな粉と黒蜜が一般的ですが、おろし生姜と水割りしょうゆを添えれば副菜の一品に。暑い夏の栄養不足を補い、熱中症予防にもおすすめです。

作り方

- 鍋にAを合わせて溶き、中火にかける。フツフツとしてきたら弱火にし、底をかき混ぜ、粘りが出てひとまとまりになり、弾力が出るまで練る。
- 1を水にくぐらせたバットに入れる。表面にも水をはり冷蔵庫で冷やし固める。
- Bを合わせてよく混ぜ、水割りしょうゆを作る。
- 器に氷を入れ、2を大きめに切って盛り付ける。薬味を添え、たれをかけていただく。

乳和食レシピ



乳製品が動物検疫の対象になります

農林水産省 動物衛生課 国際衛生対策室からのお知らせ

動物検疫とは、動物や畜産物を介して、家畜の伝染性疾病が我が国に侵入したり、我が国から持ち出したりしないようにするための措置である。我が国畜産物の輸出を促進するとともに、我が国への家畜の伝染性疾病の侵入防止に万全を期すため、国際基準や諸外国と同等の水準の検疫体制を構築する必要があることから、平成 29 年 11 月 1 日から、これまで動物検疫の対象であった生乳に加え、新たに、チーズ・バター等の乳製品が動物検疫の対象となる。

新たに動物検疫の対象となる乳製品の範囲

下表のとおり、HSコード（税番）に該当する品目が対象に追加される。なお、下表の品目であっても、個人で消費する目的で携帯品として輸出入されるものについては今回対象とはならない。

動物検疫の対象となる乳製品

HSコード	製品例
0401～0406※	乳、脱脂乳、クリーム、バター、れん乳、脱脂粉乳、ホエイパウダー、バターミルク、ナチュラルチーズ、濃縮乳 等
3502.20・3502.90 2309.10・2309.90	ミルクアルブミン、濃縮ホエイ 等 上記の乳製品を原料に含む飼料・ペットフード 等

※0401から0406の品目のうち、無糖れん乳、無糖脱脂れん乳、発酵乳、バターオイル、プロセスチーズは除く。

動物検疫所における輸入検疫(図1)

下表の乳製品を我が国に輸入する場合には、輸入に必要な要件を定めた家畜衛生条件を満たした上で、輸出国政府機関発行の検査証明書を取得し、動物検疫所で輸入検査を受けることが必要となる。

動物検疫所における輸出検疫(図2)

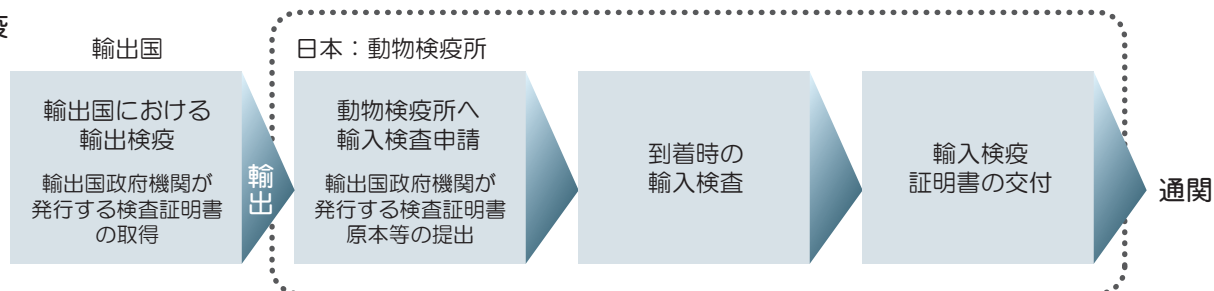
下表の乳製品を我が国から輸出する場合には、仕向先国の受入条件にかかわらず、動物検疫所で輸出検査を受けることが必要となる。

本制度の円滑な導入と的確な実施に向け、今後も引き続き、説明会の開催、動物検疫所のウェブサイト等での案内等、本制度の周知のための取組を行っていくので、ご理解とご協力をお願いしたい。

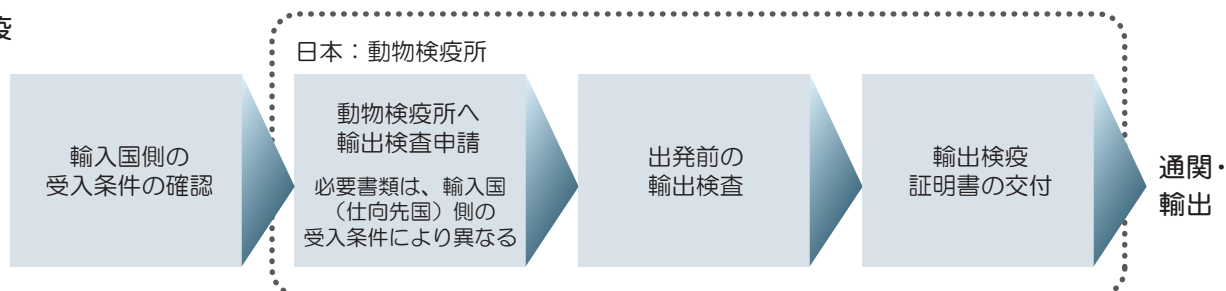
より詳細な情報は、以下のウェブサイトをご覧ください。
http://www.maff.go.jp/aqs/topix/dairy_products.html



(図1) 輸入検疫



(図2) 輸出検疫



Meeting & Event

4月

April

- 11 第1回マーケティング委員会
平成29年度のマーケティング事業および、牛乳の日・牛乳月間の取り組み。
- 12 ブロック会議（大阪・岡山・福岡・東京・仙台・名古屋・札幌）
前年度の成果・課題、当年度の重点事項のほか、「牛乳の日・牛乳月間」の新たな戦略、酪農乳業産業基盤強化特別対策事業などの説明。
- 19 乳の学術連合運営委員会
平成29年度「乳の学術連合」活動計画および、各校討課題。
- 19 酪農乳業産業基盤強化特別対策事業運営に関する説明会
主に地域生産基盤強化支援事業の実施内容の説明と意見交換。乳業者に対し産業基盤強化基金の依頼。



5月

May

- 15 学乳問題特別委員会
平成30年度学校給食用牛乳供給事業に係る要請について。
- 18 第1回需給委員会
平成29年度生乳・牛乳乳製品の見通しと当面の課題。
- 18 第46回メディアミルクセミナー
「スポーツにおける食の重要性と牛乳の役割」
鈴木志保子氏（神奈川県立保健福祉大学教授）
- 30 第1回理事会
平成29年度定時総会の招集および付議する事項、役員を選任および事務局長の任命。平成30年度学校給食用牛乳供給事業に係る要請。

6月

June

- 16 定時総会・第2回理事会
平成28年度事業報告および決算、役員を選任。
- 23 第1回生乳検査制度
管理認証制度信頼性確保部門研修会
当部門の役割と重要性、具体的事例に基づく内部点検のケーススタディや内部制度管理の評価などについての研修。

Schedule

7.18	第2回需給委員会	8.26	乳の学術連合同研究報告会	9.21-22	牛乳食育研修会(栃木)
7.26	第1回ポジティブリスト委員会	8.27	牛乳食育研究会幹事会	9.27	第3回理事会
8.2	健康科学免疫調節分科会	8.31	マーケティング委員会	9.30	栄養指導実践セミナー(神奈川)
8.2	第5回乳の日本食文化融合に関する勉強会	9.6	健康科学会議幹事会	10.7-8	乳の学術連合現地合同研究会
8.4	健康科学会議運動スポーツ分科会	9.8	社会文化ネットワーク幹事会	10.12-13	牛乳食育研修会(岡山)
8.7	健康科学リラックス安眠分科会	9.9	栄養指導実践セミナー(福島)	10.28	ヒーロー&ヒロインコンクール審査会
8.9	健康科学ライフステージ分科会	9.15	第1回マーケティング専門部会	10.30	おいしいミルクセミナー(仙台)
8.26	第2回ポジティブリスト委員会	9.20	第1回生産流通専門部会		



あえて初心にかえります。Jミルクは生乳販が一体となった業界横断的な組織であり、Jミルクレポートはステークホルダーの皆様へ実施事業を分かりやすくお伝えするツールの一つです。今回より「特別対策事業」「国際情報」「乳和食」などの連載ページを追加し、表紙では牛乳の日のイベント「ミルクで乾杯！」にご賛同いただいた臼井牧場の臼井貴之さんにご協力いただきました。多くの皆様に感謝申し上げますとともに、今後もよりよい紙面づくりを目指してまい進致しますのでよろしくお願いいたします。

j-milkレポート vol.25 発行日/2017年7月 編集・発行/一般社団法人 Jミルク

住所:〒104-0045 東京都中央区築地4丁目7番1号 築地三井ビル5階 TEL.03-6226-6351 FAX.03-6226-6354

ホームページアドレス <http://www.j-milk.jp/>  <https://www.facebook.com/jmilk.jp/>